
キスとかけて仕事ととく

サンバシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キスとかけて仕事ととく

【Nコード】

N9261X

【作者名】

サンバシ

【あらすじ】

世界を平和にするため戦うヒーローとそれを支える人の戦い。前後編のほぼ短編。

そのころは（前編）

世界を平和にするために、今日も働くヒーロー。

ヒーロー、と言われる名称はカッコよく頼りになるように思われるが、この世界のヒーローはちょっと違う。いや、この世界機構のヒーローは、と言った方が正確だろうか。

「キスしてくれませんか」

ああ、誤解しないでくださいね。

別に恋愛話の最中ではありません。

目を閉じてても耳を塞いでも変わらない現実、今は勤務中、しかも昼間です。

「完全に世界が平和になるなら」

いまわたしが勤続四年を保つ、ここ世界機構は平和を作る中心地。悪をなくすために皆で日夜戦っているのです。

そしてその戦いの先頭に立って平和を守ってくださるヒーローと次の戦いのために、打ち合わせ中です。

「無理だね」

平和を作る中心となっている世界機構といえども、完全に悪をなくすことはできません。

小さな悩みが悪を産んでは育ててしまうのです。

どれだけ努力してもなくならない、平和にならない。だけれども、

それが悪と戦うのをやめてしまう理由にはならないのです。

「では対価にする価値はありません」

女として産まれてきて早二十二年。何をもつてしても世界に平和を、と願って世界機構に就職しましたので、私の身体の一部を与えて平和になるのなら、幾らでも平和のために捧げてみせましょう。でも完全に、という願いを叶えてくれないのならば、そんなものを増長させるだけで一助にだつてなりやしません。

「平和になるなら何でもするの？」

何でもします。完全にそうなるのであれば。しかも永遠に。

でもそれは無理な話であることをわたしは知っています。戦いは常にある。そしてもちろん、わたしの身体の一部にそこまでの威力も権威もありはしません。

でもヒーローと呼ばれるあなたならば、何かを差し出せば平和を得られると言える理由があるのでしょうか。

「それが値するものならば」

「じゃあ今日のこの仕事を片付けるので、キスしてください」

じゃあ、という接続詞はこれからしてくれることへの期待感に満ちている言葉です。

期待感。

いま打ち合わせのテーブルの向かいに座るこのヒーローに、期待感。

「すみませんが、わたしと組んでからあなたは仕事をしてくださつた試しがありません。そのあなたに今日仕事をするからという理由

でその行為におよぶには些か信用が持てません」

そう、このヒーローはわたしと組んでから三カ月が経過するにもかかわらず、のりくらりと打ち合わせから逃げ、電話に出ず、無断欠勤し、果ては遊んできたお金を経費で落とそうとしました。

世界機構に勤める者に給与は出ます。しかし、働かざる者食うべからず。その原理からすれば、このヒーローは既に懲戒免職となっていてもおかしくはないのです。

「三カ月の休暇みたいに考えてくれればいいんだけど」

「休暇の申請がなされていません。そしていま三カ月の休暇を与える程、世界機構は暇ではありません」

ヒーローが勤務しなかったおかげで、他のヒーロー（仮）や担当部署に随分迷惑をかけてしまい、その後始末と業務の振り分けでわたしのこの三カ月は過ぎました。ヒーローのいない部屋で働き、上司がそれでよいと判断していたといえども、給与を頂くには心苦しい業務内容の日々でした。

「きみさあ、ここに勤め始めて何年？」

「四年になります」

「ぼくはもう十五年になるんだよ」

「はい」

「ならぼくは先輩だよな」

「はい」

「ぼくヒーローだよな」

「はい」

「じゃあキスして」

じゃあ、という接続詞は。

「お尋ねしますが」

「どうぞ」

「そのお顔と立場からしますと、あなたにその望む行為をもたらす方は大勢おられるとお見受けします」

それこそあなたのその美貌をもってして望めば、仕事をするからなどという対価を払わずとも無償で受けることが出来るに違いありません。

「そちらでお済ませになられてはいかがでしょうか」

視線を落としていた手元の書類に手を伸ばす。このポイントから今回の現場に入るならば、効率よく解決できるでしょう。印をつけ顔を上げてみると、美貌の主はきよんとした、そう、早口で説明されたから大人の言うことはよく分からないという子どものような表情をわたしに向けます。

早口で話したつもりはありません。どちらかといえばわたしの口調は遅い方なのです。

「いま、したいんだけど」

論点が擦れ違つと、説明するにしても苦慮します。

三カ月もの間、組まされたと言っても会ったのは数回。電話はそれにプラス数回多いだけでしたが、いつだってわたしたちの会話は擦れ違っていました。いまさら驚きもしません。

いみたい、というヒーローの要望に応えるために、望みに見合うものを差し出して見せましょう。

わたしにできることは、最後にひとつだけ。

もちろんキス、

「ただいま支援官を替えてまいりますので、少しお待ち頂けますか？」

ではなく、支援官変更の申請です。

たとえば、わたしがこの支援官になるために幾年ものあいだ労してきたとしても、多くの訓練をこなしてきたとしても、今回の支援官配属を心待ちにしていたとしても、ヒーローのためになるならば自ら支援官を辞することになるこの申請を出すことに何の不満もないのです。

支援官とは、ヒーローを支える為に事務作業から事後業務まで何でもこなす職種。

こうしてヒーローを支えることが平和のためになるならば、何だつてできるのです。何だつてして差し上げたいのです。

「替えの支援官、いないでしょ」

そのとおりです。でも無いものを在るものとするところぞ、わたしの支援官としての最後の勤め。

「平和のためです。みな喜んであなたを支えますので、少々お待ち下さい」

委員会に連絡を取るため急ぎましょう。書類を抱えて出入り口のドアに向かうのに少々時間がかかります。ヒーローのために備えられたこの部屋は事務作業をするだけとはいっても通常より広く、固定資産税の無駄遣いと思うけれど仕方ありません。あちこちから身に覚えのある悪意をかわすための防御を固める設備が、見えないところに無数に敷設されているのです。

二つのドアを開けて、最後のドアに手をかけ外に向かって押しま

したが、ガチという金属音だけが響いて開く気配がありません。

開かないドアを見つめて、ためいきをひとつ。コンコン、とノックをふたつ。もちろん外に向かつてではありません。わたしの後ろに付いてきた、ヒーローに対してです。

「解錠、していただけないんですか」

「だから、替えの支援官はいないよ？」

知っています。あなたの支援官は、わたし以外にいない。支援官は他にもいますが、あなたに付ける支援官は、付く人間は、もうわたししか、いない。

それでも、いまヒーローが望むものに見合うものをわたしから差し上げることは出来ません。ならば、替えの者を探すことが、作り出すことが、わたしにいま最後にできること。

「この仕事を片付けられてから、それを自ら望む方のところにその依頼は出して頂きたいのですが」

「支援官でしょ、何でもするんでしょ？ だから、いまがいいんだけどね」

もう一度、ためいきをひとつ。書類を軽く抱きしめたままくると振り返ると、案外近くにヒーローが立っていました。

「いまの発言が出ましたのでお伝えしますが、その発言はセクハラに当たります」

細かく言えばキスうんぬんの話が出た時点でセクハラと突き放すことはできましたが、やっと出勤してきた、ほぼ初打ち合わせとなるこの機会に刀に刀を返すような真似はしません。だから何とかしてヒーローと支援官としての役目を果たしたかったのですが。

「世界機構として、その発言は容認できません」

忘れてはいけません、ここは世界機構。平和のために日夜努力し続ける、平和を望む場所。そこに悪が入り込む隙間はないのです。あつてはならないのです。

美貌の主をじつと見つめます。ここで「いますぐ査問委員会を招集して」などという発言はできません。ヒーローといえど人間。カッとなって悪を行なうような、またそのきっかけを支援官として起こす訳にはいかないのです。

美貌の主にじつと見つめ返されます。冷たくも温かくもない、無表情でも笑顔でもない、穏やかな表情。

ほんとうに一体なにを考えているのでしょうか、このヒーローは。

三力月前まで、わたしがこの方の支援官になるなどとは想像もしていませんでした。十五年もヒーローという立場を保ち続けるというのは並大抵の精神力ではありません。しかもそれは十三という異例の若さから始まっていると聞いています。

他の追隨を許さないほど長期間任務を果たし続ける、世界機構始まって以来のヒーローの中のヒーロー。時代の寵児。

世界に愛されたヒーローと評論家が絶賛した男らしい顔が、髪が、揺れて。

「……だから、世界の平和に繋がらないことを行なう理由が、わたしにありません。もうこれはセクハラです」

無言でこちらに近づいてきた顔を、書類の束で遮ります。少し上から被さってきた顔を防いだため、書類の上部から紺色の前髪がのぞき、髪と紙がこすれて独特の音を出しています。その合間、呟きが書類の向こうから混じって聞こえてきました。

「きみにとっての価値じゃなくて、ぼくにとって価値があるって言わなきゃ分らないの？」

「価値うんぬんの話をしていません。もうこれは犯罪の域ですよ」

擦れ違う、なんて表現はもう間違っているかもしれません。

言語が違う、と言ってもいい。

ならば、すでにこの目の前の対象は、ヒーローではなく、悪？

「永遠の平和はあげられないけど、きみにとっての平和のために働く、と言っても？」

「ヒーローが動くのは、世界のためです」

「ぼくも一般市民と同じ人間だよ」

「そのとおりです」

「なら自分の願いのために動くことがあったっていい」

「そのとおりです」

「じゃあ、キスがしたい」

「勤務中のその発言は犯罪です」

「よし、言っただね」

少し前屈みだったヒーローの、少しだけ書類の上からのぞいていた前髪が離れていく。あつという間に最初にいた打ち合わせの部屋へと戻っていくヒーローの背中を、一瞬の間のち追いかけます。

嫌な予感です。いえ、嫌な気分です。

「次の現場に持っていくものはこれとこれ。所要時間は三十分。その付近にいる別件と一緒に片付けます。きみが印をつけたここからではなく、反対側のビルの上から。開始五分後、このポイントに来て」

てきばきと仕事の段取りを告げる手慣れたヒーローの指示を、念のため手元の書類に書き写していきます。簡単な指示は覚えていられるとしてもどんな不測の事態が起きるとも限りません。平和のため、ミスなく一件一件片付けるためにも、万全の態勢で臨みます。もちろん、わたしに何かあった時はこの書類は抹消される仕組みになっていますので、情報漏えいの心配についても抜かりはありません。

「了解しました」

「この場所への移動はいまから何分かかる？」

「二十三分です」

「ではいまから五十三分後、このポイントにいてください。誤差はプラマイ三十秒」

「了解しました」

「いまから五十五分後、任務完了として今日の勤務からきみを解除します」

それには、はい、と言う訳にはいきません。

「いえ、今から五十五分経過した任務完了後、そのポイントからでしたらプラス十七分後わたしはこちらに戻り、組んで初となる任務報告書をまとめます」

嫌な気分は当然です。

「勤務中の指示には従ってもらわないと困るんだけどね」

先程の発言からすれば、こうなることは予想できたからです。困る、というのはこちらの言い分です。勤務中でなければよいと言ったつもりはありません。

「理由なき勤務解除の指示には従えません。支援官としての業務を果たす方が優先です」

勝手な解釈が通ると思われるはいけません。支援官として何でもしますが、支援官としてはつきり告げるのも時として必要です。

「明日に回して下さい。ぼくとの用事が優先です」

「勤務中に勤務後の個人的な時間に勤務後の拘束を指示するのはパワハラ、これも犯罪です」

「勤務中にキスして欲しいって言わないんだからいいでしょ」
「言ったも同然です」

そうして互いに無言のまま、二分が経過しました。

そのころは（後編）

こう着状態を打破するにもお互いの望みは真反対にあります。

妥協点を探す必要はありません。妥協、とはわたしの望む平和を揺るがす単語です。平和のために譲る部分はひとつだってありません。それでも平和のために、わたしは何だってするので。もちろん平和への固い決意を貫きつつです。

沈黙から二分半後、互いの言い分を通す結論はこうです。

「つかぬことをお尋ねしますが」

「どうぞ」

「三カ月ものあいだ、どうして任務を放棄されたのですか」

「放棄はしていないよ」

「でも出社されなかった」

「ぼくじゃなくても片付けられる内容だと判断したから」

「一組織に所属しているのですから、どのヒーローに割り振るのかを決めるのは委員会の役目、そしてその指示に従って動くのは所属している者の役目として認めるべきではないでしょうか」

「もう十五年もやってるんだよ。少しの自由があったっていい」

平和のためとはいえ、色々と諦めたくなくなります。格が落ちるとはいえ、ヒーローはこの方以外にも（仮）がいるのです。でも不遜な声の裏に何かがある、と信じてしまうのは同じ組織の一員としての欲目でしょうか。

「……その少しの自由のために平和が脅かされるのであれば、あなたはその任務を一時的に放棄するのではなく全面的に降りるべきだった。その一時的な理由のために、だれかが害を受けるのを止められるヒーローがいらないのなら、きちんと他のヒーローにその職務を

譲るべきです」

十五年。ヒーローとして真つすぐに立ち続けるその年数は決して短くはない。褒められてしかるべき年数。

けれど、その年数を免罪符にしてもいい理由にはならない。他の職種ならば、まだ許されることもあつたでしょう。

けれど、ヒーローだから。世界の平和という壮大な目標を掲げる世界機構に属するヒーローだからこそ、許されないこともあるのもまた事実。厳しく甘くもない、これが現実。

どれだけ褒められ、敬意を集め、信用されても。

たった一度の失敗が、たった一度の過ちが。

すべての失墜。すべての崩壊。

それを防ぐべく、引退という制度がヒーローにはある。

「それを決めるのはきみじゃない、ばく自身だ」

「……分かっているのなら、なぜ任務を放棄したのです。なぜ

」

逃げたのですか。

これをヒーローに告げるのには、とても、とても……そう、わたしにとって許し難いほどの苦痛を伴います。

世界の平和のために、あなたの力が必要なのです。

あなたがいないと、守れないものがあるのです。

そのあなたに、ヒーローに。

逃げるという言葉ほど、似合わないものはないのです。

ここまで支援官に言わせるヒーローはいないでしょう。後方作業に徹すべき支援官は、時として命をかけて戦うヒーローにそれを

言う資格も何もないのです。ならば自分でヒーローをやってみる、と言われればそれまでのことです。その力のない人間が、その力を持つ人間に何かを指示する権利など、何もないのです。

やはり、最後の一言はどうしても言えませんでした。喉まできて飲みこみ、無理やり飲み落とします。

書類や地図の置かれたテーブルの上を見つめていた視線を、はは、という乾いた笑い声を追いかけて上げました。見上げたその先では戦う男の手が、穏やかな表情を自ら覆い隠していました。

十五年ってね、と表情を隠したヒーローが穏やかな声で告げます。

「長いと思うでしょう。だれもここまで続けた人がいない。だけどね、自分が望んで始めたことなんだ、それが長いとか短いとか、考えた事はないんだよ」

ただよく聞かれるからその年数を答えているだけ、とヒーローは続けます。

「平和をずっと望んでる。きつときみよりもずっとね。だけど向かったその先にある数々の映像は、自ら平和を壊しているとは思えないものだよ」

戦うその手は、どれだけの悪を打ち倒し、どれだけ傷をその身体に受けたのだろう。どれだけの傷を、その心に、精神に受けたのだろう。

支援官としての訓練期間中に見聞きしたヒーローの現実が、いまここにある。

「だけど、その悪を倒したその背後にある平和をも、いつだって見てきたんだ」

戦いに傷ついたその手が動き、ヒーローの表情を露わにする。けれどその表情は、先程と変わらず穏やかなものでした。

「なのにぼくはこの三カ月を個人的な理由で放棄した。だからきみにはさつき飲みこんだ台詞を言う権利がある。相手がヒーローだから言えないの？ ヒーローでなかったら言えてるの？ それこそ傲慢だ。一般市民とヒーローを分けるものなんて、何もない」

ヒーローの见えない手が、わたしを襲う。

笑みでもなく怒りでもなく、口元に決意を定めたヒーローが、わたしに戦いを挑む。

「正しいことを、間違っている人間に言うことに、上も下も、無い」

この目の前のヒーローは。

この人は。

ああ。この感情を言い表わす単語は、あまりに陳腐で、平易で、もどかしくも燦然とわたしの内に湧き上がります。

この三カ月間、何があつたのかを聞く気はありません。ヒーローにしか分からない数か月だったのでしよう。それでも、誰より自分を責めていたのは、誰より引退の言葉を心に燦らせていたのは、ヒーロー本人だったのでしよう。

それは、ほんとうに、ほんとうに。

計画の要となる書類の束の上に構わず手を置く。そこに重心を定め、先程までヒーローが自ら表情を隠していた右手に向かって手を伸ばす。

幾多の戦いをこなしてきた経験から、ほとんど動揺を見せないヒーローが少しの戸惑いを表情に浮かべましたが、このわたしの感情はそんな稀な表情を見ても止められません。

外見の美しい人。けれどあなたはその美しくも醜い感情をも、ど

れだけ内側に秘めているのでしょうか。それこそが誰もが見惚れ、誰もがその背に平和を望みます。そうして垣間見た片鱗は、ほんとうに。

わたしの右手が戦うヒーローの手を？まえました。その指を、固く固く、握らずにはいられません。

「支援官としてではなく、一市民として、あなたに敬意を払います。あなたの行動や望みを、心から大切にします」

ぎゅっと肉厚な、鍛え上げられたそれと握手を交わせば、自分が笑うのが分かります。

職務としてでなくとも、この人を大事にしたい。平和のためなら、それを葛藤しながらも作り出すヒーローのためになら、何でもしましょう。

それこそが、わたしの望み。

重心を置いた片手はそのままに、握手を続ける手を少しだけ引き寄せ横に倒しました。その上に少し屈みこみ、ヒーローの躊躇いと決意を抱えた手の甲にゆっくりと唇を落とします。

この手にわたしの唇が触れるのは、なんて幸せなことでしょう。なんて胸が苦しい瞬間なのでしょう。

世界機構を目指して良かった。ヒーローを支援するための資格を取れて良かった。このヒーローが引退する前に、会えて良かった。たった一度のキスでは惜しいのですが、この感情を表わすのにそれを繰り返すのは不躰です。それでも名残惜しくて手を離す寸前に触れないキスを空気のように指に流しましょう。

瞬間、もう一度手を取ろうと素早く伸びてきた手を辛うじてかわしました。

無敵のヒーローの手をかわすとは、誰もが持つのも同じでわたし

も平和を望みながらも倒しても倒しても浮き上がってくる悪をもっているでしょう。

「……勤務中ですよ」

「敬意を表すのには選ばないものです」

しれつとして書類を整え終わりました。さあ、あなたの望みも叶えました。世界の平和のために参りましょう。

書類を抱えて出入り口のドアに手をかけ、今度は簡単に開いたそこを通りながら先程打ち合わせた段取りを口に出さず復唱していきます。

後ろでゆっくり歩くヒーローもいつものように腕時計へと視線を落とし、作戦実行のためのタイミングを計算しています。

さあ、いざ！ と小さくても世界のためにと足を向けたその出端を挫くのは もちろんヒーローご本人です。

「キスしてください」

「先程お手にさせていただきました」

「場所がぼくの望みと違うんだけど」

「場所の指定は仰いませんでしたし、受け付けるつもりもあります。そんなことより、移動に誤差が生じています。現在マイナス三十五秒」

「今回の仕事を確実に実行し終えたいんですよね」

「もちろんです。マイナス三十七秒」

「ではここにキスを」

もちろん、ヒーローに視線は送りません。なので、場所がどこか知りません。知るつもりありません。

早足で移動車両が格納されているところへ歩き続けていると、ふむ、と何か納得した息が聞こえてきました。

「きみにはきみの平和のための戦いがある」

「そのとおりです」

「ぼくにはぼくの平和のための戦いがある」

「もちろんです」

「だから、ぼくだけの平和を探して手に入れたって、いいでしょう？」

ヒーローとして今までひたむきにやってきたんだから、ご褒美に笑ったような声がわたしの横を歩くヒーローから聞こえてきました。

「……それが、キス、と言われないのでしょうか」

「まあそうとも言っ」

「勤務後にあなたからのキスを望む方からお受け取り下さい」

「人にあげるつもりはないよ。もらいたいだけ」

「差し上げたくてたまらない方は大勢いますよ」

「知らない誰かからなんていらないし、欲しいのはきみからだけ」

全く意味が分かりません。

何より、勤務中に話す内容ではないように思われます。

「だから、もう一度」

「だから、もう何度でも言いますが、わたしのキスには何の価値もありませんが世界の平和のためにならない行為はする気がありません」

「平和のためになるよ。ものすごく、ぼくの平和のために」

「私の望む平和は、世界のためのものです」

「そっ、だから戦うんだよね。きみも、ぼくも」

……何だか戦いの意義がどこにあるのか分からなくなってきました。これは洗脳でしょうか？　やはりいま横にいるヒーローはヒーローではなく、悪？

そうして誤差はついにマイナス一分三十秒を越え、わたしたちの仕事とキスを巡る飽くなき戦いは世界機構という平和を目指す舞台で切って落とされたのでした。

F i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9261x/>

キスとかけて仕事ととく

2011年11月11日02時49分発行